

# ラテン・アメリカにおけるクリオージョ

中 川 清

## 1. クリオージョとは

スペイン語のクリオーリョ *criollo* は、南米ではクリオージョと発音される。英語では *creole* であり、フランス語では *créole* であるが、我が国では「クレオール」と片仮名表記されている。南米アメリカ大陸では広く用いられている言葉であるが、我々日本人には、その意味を正しく理解するのに、いささかのもどかしさを感じさせる記号である。

先頃物故した安部公房は、海外において高い評価を得ていた作家であるが、晩年の数年間、「クレオール」に強い関心を抱いていたことは良く知られている。常に前衛的であったこの作家にとって、「異文化が接触した結果に生成する新言語」としてのクレオールが、興味の対象となっていた。『世界』1987年4月号には、「クレ奥ールの魂」が掲載されているが、安部公房はその冒頭部で次のように記しているが、クレオールに対する関心の始まりを示すものである。

〈翻訳物の推理小説を読んでいたら面白い表現にぶつかった。「中南米出身の白人が好むクレオール料理」というのである。クレオールという言葉学用語が、まさか料理と結びつくとは思わなかった。土着のゲテモノ料理くらの意味で使われたのだろうか。〉

それまでの安部公房は、「クレオール」という記号を「言語学用語」として把握していた。言語学特に言語生成の研究者にとって、例えばハイチにおけるフランス語系クレオール語は、たしかに興味のある対象である。そうした

理解からすれば、「クレオール料理」などとは、まことに意外な存在であろう。

ところで、日本に到着する13年前のラフカディオ・ハーンは新聞記者としてニュー・オルリンズに住んでいたが、その頃のニュー・オルリンズはフランス系クレオールの色彩が濃厚であった。ブドゥーの影響を受けた黒人達の宗教や、フランス系クレオール語に強い関心を寄せていたハーンは、1884年『ラ・クジヌ・クレオール』の題名で、クレオール料理に関する解説書を出版している。当時のルイジアナ州における代表的なクレオール料理は、トマトやピーマンがたっぷり入ったコメ料理や、コメで作ったプディング状のデザートなど、コメを使った料理が少なかった。

中南米各国には、それぞれの土地のクリオージョ料理cocina criollaと呼ばれる素朴な郷土料理が伝えられている。前述のようにコメを使った料理が多いのは、南欧食文化の影響であろうか。

クリオージョ料理は、それぞれの国において微妙な味付けの変化があるものの、コメやアズキ、マンディオカあるいはユカといわれるイモの一種など、いわば共通の食材が使われることが少ない。どこことなくアフリカの影響が感じられるのも、クリオージョ料理の特徴である。

クリオージョ料理の説明に筆をとられてしまったが、以下の稿では、スペイン語系クレオールをクリオージョ（又はクリオーリョ）、フランス語系の場合にはクレオール、英語系の場合にはクリオールと、それぞれ識別して表記することを原則とした。

## 2. クリオージョに対する理解

クリオージョというスペイン語には、前述のように郷土料理を意味するcocina criollaあるいは、「生粋（きっすい）の自国民」を意味するun buen criolloなどの用例があり、地域を限定する形容詞として用いられることが多い。一方、最近の我が国では、「クレオール」という言葉の歴史的な背景が十分に理解されないままに、ある種の目新しさをもってクレオールに対する関

心がたかまっている。

先頃、『越境する世界文学』（河出書房新社）という、なにやら目新しい文学論集が刊行されているが、いたるところで「クレオール」という表現が眼につく仕組みになっている。例えば、「クレオールから宇宙的視線へ」、そして「東北文学論 ― 植民地文学からクレオール文学へ」といったタイトルの文学評論が収められている。この「東北文学論」などとは、本来の意味のクレオールと、一体どのような関係があるのかとまったく不可思議である。その一節には、「宮沢賢治がそうしたように、寓意としてなぞってみせるのがクレオール文学なのである」と書かれている。

ここで扱われている「クレオール」という記号は、どこか目新しい言葉遊びとしか思えないが、極めて真面目で、初歩的な知識しか持ち合わせていない読者であれば、「クレオール文学」などと、世界文学における新しい流れが出現したのかと早合点するのではないだろうか。宮沢賢治とクレオールが並列で論じられると、「クレオール」とはいったいどのような概念を持っているのかと、途方にくれざるを得ない。こうして、文学的な関心として「クレオール」をとりあげることによって、本来の歴史的あるいは、社会的な背景は全く無視されてしまっている。

今から百年ほど前に、クレオール的なものに興味を刺激されていたラフカディオ・ハーンは、1890年に「仏領西インド諸島のクレオール女」という文章を書いている。更に、『仏領西インド諸島の二年間』を来日間際に出版しているが、当時の日本が持っていた異国情緒に激しく刺激される直前のハーンは、「クレオール性」が持っているある種の混合した魅力に惹かれていた。

帰化して小泉八雲と名を変えたハーンの数多くの著作を翻訳している平井呈一は、「八雲の小説」という文章を書いているが、「ハーンがかねがねとくに関心を持っていたのは、黒人よりも血液の複雑なクリオール人でありました」と解説している。「クリオール人」というのも奇妙な表現であるが、平井氏は、クレオールを人種的に特別な存在として理解しているようである。しかしながら、黒人であれ白人であれ、あるいは白人と黒人の混血であること

に関係なく、アメリカ「新」大陸で生まれたのであれば、すべてクレオール（あるいはクリオージョ）であるのが、「クレオール」本来の定義である。

前述の安部公房氏によるクレオールの認識とは別に、文化人類学の見地からクレオールを理解しようとする試みも盛んである。例えば、文化人類学者今福龍太の『クレオール主義』（青土社）には、“The Heterology of Culture”というサブ・タイトルがつけられている。文化人類学的に見れば、クレオールという存在は、「文化の異質構造」を持ち合わせていることになるのだろう。

これまでの稿では、我が国におけるクレオールに対する理解について考えてみたが、クレオールの附随的な側面に関する理解が先走ってしまって、クレオール本来の意味が明確に理解されていないように思われる。そのため、クレオールに対する考え方がかえって複雑になっており、クレオールがなにやら神秘的な存在になっている。スペイン植民地時代以降のクリオージョンの存在を明確に把握するという、本来の理解方法が欠落しているようである。

以下の稿では、ラテン・アメリカ史におけるクリオージョの存在と、彼等の意識について考えることにしたい。

### 3. クリオージョの由来

クリオーリョ（又はクリオージョ）というスペイン語が文献史料に現れるようになったのは、1963年頃といわれている。元来、クリオージョとは、16世紀後半以降の新大陸で生まれたスペイン人を指していたのだが、そのうちに新大陸で生まれたヨーロッパ人を指すようになった。そして、クリオージョの対極にあって、新大陸のスペイン植民領における政治的支配者層を形成していたのが、本国から派遣されて来たスペイン人であるが、彼等はペニンスラール（「イベリア半島人」の意味）と呼ばれていた。

クリオージョの語源に関しては、ラテン語のcreateに由来すると考えられ

ている。「生む、創造する」を意味するこのラテン語は、英語のcreateの語源である。元来、アフリカから連れて来られた黒人奴隷が、ブラジルで生まれた子供に対して用いられていたポルトガル語のクリオウロcriouloが、スペイン語のcriolloとなり、英語のcreoleとなったと言われている。その後、西インド諸島やアメリカ大陸において、クリオージョは、白人、黒人ともに「現地で生まれた人」を指すようになっていく。

研究社『新英和大辞典』（1980年初版）によれば、creoleという語彙が、ポルトガル語からスペイン語、そしてフランス語を経由して英語にとり入れられた年代を1604年としている。とすれば、スペイン語の史料にクリオーリョ（クリオージョ）という言葉が見られるようになってから40年を経過した時点で、英語の文献に初出したことになる。この40年という時間は、当時の状況を考えると意外に早い伝播と言えるのではないだろうか。

ついでに手許にあるスペイン語辞典によって、クリオーリョの語義を調べてみよう。

“Diccionario Manual”として知られるスペイン王立アカデミア編『絵入りマニユアル・スペイン語辞典』では、クリオーリョの語義を次のように説明している。

- (1) ヨーロッパ人を両親として、ヨーロッパ以外の土地で生まれたヨーロッパ系の子供達。
- (2) アメリカ大陸で生まれた黒人。アフリカから連れて来られた黒人の対極に位置する黒人。
- (3) ヨーロッパ人の子孫である南北アメリカ人。
- (4) 南北アメリカ諸国固有の事物あるいは習慣。

このアカデミア辞典とともに、手軽なスペイン語辞典として知られる『ラールス絵入り小辞典』（Pequeño Larousse Ilustrado）では、次のように定義されている。

- (1) 植民地生まれの白人及び、アメリカ大陸生まれのスペイン人。

- (2) アメリカ大陸生まれの黒人。
- (3) アメリカ大陸においては、外国産と区別して、自国産の動植物などを指す。例えば、カバージョ・クリオージョ（自国産の馬）、パン・クリオージョ（自国製あるいは自国風のパン）など。
- (4) クレオール語。ヨーロッパ語から派生し、有色人種によって使用されている方言。ヨーロッパ語の語彙を使用しているが、文法的には融通無碍である（後略）。

以上はいずれもスペイン語原文の拙訳であるが、クリオーリョというスペイン語の対象となっている人種的あるいは社会的階層の変遷並びに、その拡がりを簡明に示していると言えるだろう。

#### 4. クリオージョの形成

インディオと呼ばれる先住民族を除いて、「新大陸」の南北で生まれた者は、白人であれ黒人であれ、すべてクリオージョとして位置づけられるのが広義の解釈である。しかしながら、植民地時代の新大陸にあって中間階層を形成していったのは白人クリオージョであり、黒人クリオージョは疎外されることになる。

「ペニンスラール」と呼ばれた白人支配者層がクリオージョの対極にあることは既に触れた通りである。更に、スペインあるいはヨーロッパ各地から新大陸からの新たな移住者達はチャペトンchapetónと呼ばれていたが、そのまま新大陸に住みついた連中は、やがて白人クリオージョ階層に組み入れられていった。白人クリオージョは、植民地社会における新興市民階級を形成するとともに、富裕階層の一部を形成するようになったが、黒人のクリオージョが奴隷の地位から解放されるためには、19世紀半ば頃まで待たねばならなかった。

奴隷禁止令が実施された19世紀半ば以前のフランス領西インド諸島では、アフリカ生まれの黒人奴隷に対して、島で生まれた黒人達はネグル・クレ

オールnégre créoleと呼ばれていた。そして、現地生まれの白人達はブラン・クレオールblanc créoleである。同じクレオールであっても、白人と黒人の社会的役割が厳然と区別されていたことはいうまでもない。

同じ語源を持つ記号が、スペイン語、ポルトガル語あるいはフランス語によって少しずつ発音が異なるように、カリブ海域を含めた南北アメリカ大陸の地域によって、クリオージョという言葉の対象となる社会階層にも、若干の相違が見られる。ブラジルでは、黒人の子孫達がポルトガル語でクリオウロcriouloと呼ばれていた。そして、スペイン植民地において独立運動をすすめていったのは、スペイン人植民者の子孫を中心に、スペイン語でクリオージョcriolloと呼ばれる階層である。

北米大陸においては、元来、ルイジアナ州に移住して来たフランス人移民の子孫に対して、フランス語のクレオールcréoleという言葉が使われていた。やがて、メキシコ湾岸諸州に居住していたスペイン及びポルトガル系移民に対しても、英語のクリオールcreoleが適用されるようになった。のちには、北アメリカで生まれた黒人もクリオールと呼ばれるようになり、creoles of color (有色クリオール) という言葉が使われている。特殊な例としては、古い時代のアラスカでは、ロシア人とアメリカ・インディオの混血を祖先に持った人々が、クリオールと呼ばれていた。

ところで、植民地で生まれたクリオージョ達が、なにかとヨーロッパの本国から蔑視されていたことをうかがわせるいくつかの語法がある。例えば、a la criollaというスペイン語の成句は、直訳すれば「クリオージョ風に」と言うことになるが、「形式ばらずに」、「気どらずに」といった意味に用いられている。そして、indolence créoleというフランス語は、「植民地生まれの白人の無精さ」を意味している。

## 5. クリオージョの意識

クリオージョという用語が、人種的に混血した存在を意味するものでないことは、これまでの説明で充分であろう。しかしながら、クリオージョと呼



ばれる人々が、精神面においてある種の混血的要素を持ち合わせていることは否定出来ない。そして、クリオージョの意識としては、常に白人優位であるとともに、ヨーロッパへの憧憬は抜き難いものとなっていた。

植民地におけるクリオージョ達は、先住民族であるインディオあるいは、アフリカ大陸から送り込まれて来た黒人に対しては優位な立場にあった。しかしながら、本国から派遣されて来た植民地行政官などの支配者層に対しては被支配者の立場に立たざるを得ないという二重構造を余儀なくされていた。

クリオージョ達はまた、新大陸の居住者としての独自性を自覚するとともに、本国の支配に対して被抑圧者であることを強く意識するようになり、やがて独立運動への参加につながってゆくようになった。その一方では、ヨーロッパの精神文化及び物質文明に対する憧れは否定し難いものとなっていた。こうして、白人クリオージョの意識の底には、ある種のアンビバレス（二つの異った感情の共存）が根づくようになっていたと言えるだろう。

やがて、独立運動という具体的な行動に際しては、こうしたアンビバレンスも、単なる意識の中にとどまっていることは許されなかった。それは、多くのクリオージョにとって、植民地支配への抵抗あるいは宗主国への同化という、両極に分化した行動のいずれかを択一せざるを得ない状況であった。

ここでは一つの例として、米西戦争当時のキューバにおけるクリオージョ達の対応について考えてみたい。キューバ空軍政治局編『キューバ史』（Historia de Cuba）には、米西戦争における両軍の兵力が、次のように記されている。

#### スペイン軍

正規軍	19万人
スペイン人義勇軍 Voluntarios	4万人
キューバ人非正規軍 Guerrilleros	3万人
合計	36万人

キューバ独立軍及びアメリカ合衆国軍



キューバ独立軍	9万4千人
アメリカ合衆国軍	2万人
合計	7万4千人

Voluntariosとは、義勇兵を意味するスペイン語であるが、本国に帰属しているスペイン人義勇兵に対してのみ用いられていた。そして、現在ではいわゆる「ゲリラ兵士」あるいは「非正規軍兵士」の意味で用いられるスペイン語Guerrillerosが、現地の白人クリオージョによって編成された義勇軍（非正規軍）に対して用いられていた。スペイン軍の側に立つ同じ義勇軍であっても、スペイン人と白人クリオージョは厳然と識別されていたのである。

スペイン軍に味方するクリオージョ「義勇軍」は極めて排他的であり、白人クリオージョの参加だけが認められていた。一方、マンビーセスmambisesと呼ばれていたキューバ独立軍を構成していたのは、その主力は白人クリオージョであったが、白人と黒人の混血であるムラートあるいは、黒人達もまた独立軍兵士であった。

ところで、数の上では圧倒的に多数であるスペイン軍が敗退した最大の理由は、米軍及びキューバ軍の兵力配置がキューバ東部に集中していたことによるものである。キューバにおける米西戦争の主戦場は、この島の東部で展開されたが、そこはまた人口に占める黒人の比率が大きな地域でもある。ムラートと呼ばれる黒人と白人の混血あるいは黒人までも吸収していた独立軍が、戦場となった土地の事情に熟知していたことはいうまでもない。

旧宗主国からの独立を達成する時期にあつては、クリオージョ（特に白人クリオージョ）には、クリオージョとしてのアイデンティティーが強く意識されていただろう。新大陸の植民地におけるクリオージョの存在そして、18世紀末ヨーロッパの新しい政治思想に刺激されたクリオージョの知識階級及び、彼等を支持していた社会階層は、中南米各地における独立運動の中心勢力となっていた。しかしながら、旧植民地が独立して近代国家を形成してゆくにつれて、クリオージョとして総称されていた社会階層も、それぞれの

国家に帰属する国民となってしまった。

ところで、独立当時のクリオージョ達のすべてが共和制を志向していたわけではない。ラ・プラータ地方のクリオージョ達は、1810年5月、ラ・プラータ副王を辞任させるとともに、ブエノス・アイレス政務委員会を設立している。この時、クリオージョの指導者達の間では、独立後に王制を採用するかあるいは、共和制へ移行するかで意見が分かれていた。王制を採用する場合には、ヨーロッパのいずれかの王族から王を迎えることが考えられていた。政治体制に関して彼等の間でみられた意見の対立は、クリオージョ達の意識の多様性の一面を示しているといえるだろう。

独立運動当時にあつては、ナショナリズムのたかまりと結びついていたクリオージョ意識が、独立の達成とともに大きく変化していったことは既に指摘した通りである。ラテン・アメリカにおけるスペイン系クリオージョとしての共通性は、近代国家における国民へと個別化していったのである。現在におけるクリオージョという記号は、「土着の」あるいは「郷土風の」といった程度の意味合いで使用されることが多い。歴史的あるいは社会階層的な存在を対象としていた「クリオージョ」という呼称も、コシーナ・クリオージャ（郷土料理）などと、形容詞的機能を持った記号に変わってしまったといえるだろう。

## 6. クリオージョと先住民族

18世紀末におけるスペイン領新大陸の総人口と、その人種的あるいは社会人口的構成を示す数字については、さまざまな推定がされている。勿論、いずれも正確を期し難いが、ここでは一つの指標として、寺田和夫『インカの反乱』（思索社）に記載されている数字を借用させていただく。

先ず、18世紀末における新大陸スペイン植民地の総人口が1,610万人と推定されている。そして、次のような人口構成が算定されている。

	人口	構成比
スペイン人	30万人	2%

### ラテン・アメリカにおけるクリオージョ

白人クリオージョ	300万人	19%
混血（メスティーソ）	500万人	31%
インディオ	700万人	43%
黒人	80万人	5%

支配者階層を形成していたスペイン人は、全人口の僅か2パーセントを占めていたのに過ぎないのだが、植民地行政組織、教会あるいは、経済そして軍隊などのあらゆる社会組織を通じて支配体制を確立していた。19世紀に入ってから、白人クリオージョを中心に植民地体制からの脱却が達成されることになるのだが、18世紀末における人口の社会構成比を考えれば、新大陸の各地において独立の気運がたかまっていたのは当然といえるだろう。

ところで、1780年にペルー副王領で端を発したトゥパク・アマルの反乱は、インディオの大規模な反乱として知られている。二年間にわたった原住民族の蜂起は、新グラナダ副王領そしてラ・プラタ副王領の一部にまで波及している。現在のペルーにトゥパク・アマル革命運動（MRTA）を名乗る反政府グループが存在するのは、ラテン・アメリカにおける先住民族の抵抗の歴史が今日に至る迄も記憶されていることを示している。

1770年代終り頃のペルー副王領では、トゥパク・アマルに代表されるインディオの反乱と、クリオージョの反乱が相前後して互いに触発し合う関係にあった。その当時、白人クリオージョを中心とする小規模な反乱が各地で頻発していたが、トゥパク・アマルの反乱は、こうした状況を背景に大きな拡がりを見せることになった。

現在のボリビア国内にあるオルーロ市で勃発した反乱は、白人クリオージョが首謀者であり、その中心勢力であったが、インディオと手を結ぶことなく、スペイン軍によって圧迫されてしまった。折角のクリオージョの反乱も、数の上では絶対的な優位に立つ先住民族と有効に連合し得なかったため、スペイン本国を代表する支配体制を打破し得なかったのは当然の帰結であった。

ラテン・アメリカ各国の独立とともに、白人クリオージョを新たな支配者階級とする近代国家が成立し、インディオもまた国民の一部を構成することになった。しかしながら、大部分のインディオ達が社会階層の底辺の位置に甘んじざるを得なかったのは、植民地時代とほとんど変りがなかった。

ところで、先頃出版された『先住民族インカの抵抗五百年史』（新泉社）の著者ワンカールは、ケスワ（ケチュワ）人ラミーロ・レイナーガ・ブルゴーアの筆名である。スペイン人そして白人クリオージョに対する先住民族インカの抵抗の歴史を詳述したこの本は、クリオージョに対する先住民族の主張によって裏付けられている。改めて言うまでもないが、先住民族から見れば、白人クリオージョもまた、スペイン人と同列の外国人支配者なのである。

今日の南北アメリカ大陸は、いくつものに分割され、白人クリオージョによって支配される共和国群である。第二次大戦後、アジア及びアフリカ大陸の数多くの旧植民地が独立し、白人勢力は駆逐された。しかしながら、19世紀半ば頃を中心に、植民地支配を逃れたラテン・アメリカでは、白人クリオージョが新たな支配者層を形成し、先住民族は社会の底辺に埋没してしまった。

ことさらに「国際先住民年」が制定されている現在のラテン・アメリカにおいては、クリオージョの存在が意識されなくなったのとは対照的に、インディヘナindigenaの名で総称される先住民族の意識が高まりを見せている。

## 7. クレオール女達

### — ヨーロッパ人が見たクレオール

19世紀のフランスでは、二人のクレオール女が歴史に名を残しているが、彼女等は魅力的なクレオールであった。

#### (1) 皇后になったクレオール

ナポレオン・ボナパルトの妃となったジョゼフィーヌは、マルティニック島で生まれたクレ奥ールの女である。ナポレオンをめぐる虚実とりまぜた無

数のエピソードの中には、ジョゼフィーヌに関する挿話が少くないが、クレオールとしての彼女の側面は余り伝えられていない。18世紀後半におけるフランス系のクレオールがどのような存在であったか、ジョゼフィーヌを通して考えてみたい。

ジョゼフィーヌは、マルティニック島の県都フォール・ド・フランス（マルティニックは現在もフランスの海外県である）に近い農園で生まれている。父方のタッシュ・ド・ラ・パシェリ家はフランスの下級貴族であり、1726年、彼女の祖父の時代にこの島に移住して来ている。母方もまたフランス貴族であるが、父方の家族よりも早い時期からこの土地に住みついていた。

少女時代のジョゼフィーヌは、プロヴィダンス修道女会が経営する島の女学校で教育を受けていたが、成長した彼女はマルティニックの社交界（といってもフランス人クレオールの社会）で目立った存在になっていった。生涯を通じてジョゼフィーヌが身につけていた官能的な魅力は、カリブ海に浮ぶこの島の熱帯の気候によって育まれたものといわれている。

ジョゼフィーヌは、16歳の時に初めてフランスの土を踏んでいる。当時の上流階級のクレオールの若い女達がそうであったように、その目的は結婚のためである。彼女の夫となったアレクサンドル・ド・ボアネル子爵も、マルティニック生まれの軍人である。彼の父ボアネル侯爵は、かつて仏領西インド諸島の総督を務めたことがあり、息子のボアネル子爵は5歳の頃までマルティニックに住んでいた。

フランス革命の混乱のなかで夫のボアネル將軍は処刑され、ジョゼフィーヌは32歳で未亡人となってしまった。恐怖時代の反動として到来した享樂的な世情の中で、パリの社交界で知られるようになったジョゼフィーヌは、「淫蕩なクレオール女」という好ましくない評価を受けていた。カリブの島で育った彼女は情熱的な印象を与えるとともに、何かにつけて挑発的と見られていた。「R（エル）の音をほとんど響かせないクレオール特有の喋り方が、彼女の最も大きな魅力の一つになっていた」と、伝記作家ジャック・ジャン

サンは記している（『恋するジョゼフィーヌ』中央公論社）。

若き將軍ナポレオン・ボナパルトと知り合ったジョゼフィーヌは、やがて皇后の地位を手に入れるのだが、ナポレオンの心をとらえたのは「クレオール」の女」の魅力によるものと取沙汰されていた。そして、6歳も年下のナポレオンから、ジョゼフィーヌはいつも「プティット（可愛い）クレオール」と呼ばれていた。

## (2) ボードレールの愛人

ボードレールの『悪の華』には、デュバル詩篇といわれる16篇の詩が含まれているが、いずれも、ボードレールの愛人であったジャンヌ・デュバルを主題にした作品である。

黒人と白人の混血女性であり、「黒いビーナス」といわれていたデュバルの経歴については不明な点が多く、その出身地についても諸説があった。そうしたなかで、ボードレール研究家の一人は、ジャンヌ・デュバルが1859年に入院した施療病院の患者名簿を検証して、彼女が1827年にサント・ドミンゴに生まれたことを明らかにしている。こうした事実を紹介した河盛好蔵『パリの憂愁——ボードレールとその時代』（河出書房新社）では、「サント・ドミンゴ（ドミニカ共和国）生まれ」としているが、この場合のサント・ドミンゴは、現在のドミニカ共和国の首都サント・ドミンゴに特定されるのではなく、その頃、フランス語でサン・ドマングと呼ばれていたサント・ドミンゴ島（イスパニョーラ島）全体を指していると考えたほうが良いだろう。

新大陸への進出に遅れたフランスは、17世紀半ば頃からカリブ海地域に進出している。1697年にイスパニョーラ島の西側三分の一をスペインから割譲されたフランスの植民者達は、スペイン語でサント・ドミンゴ島と呼ばれていたこの島の名称を、フランス語風にサン・ドマング島と呼び換えていた。ところが、この島のフランス植民領は1804年に黒人共和国ハイチとして独立している（実際に共和制に移行するのは1806年以降である）。更に、この島の東部三分の二を占めていたスペイン植民地（現在のドミニカ共和国）も、1822年から22年間にわたってハイチに領有されていた。

ともあれ、新大陸最古の植民地都市サント・ドミンゴは、ジャンヌ・デュバルが生まれた当時においては、アフリカ系クレオールによって支配されていた。施療病院に残されていた前出の記録の内容に間違いがなければ、デュバルは、旧フランス植民地生まれのアフリカ系クレ奥ールの女である。

ボードレールの友人であった詩人のテオドール・ド・バンヴィルは、ジャンヌ・デュバルについて次のように記している。

〈彼女は非常に背の高い混血の女で、無邪気で、浅黒い美しい顔をし（中略）、その物腰は女王のようで、野性的な愛嬌にあふれ、崇高であると同時に野獣のような何かを持っていた〉（河盛氏前掲書）

黒い瞳に、ものうげな所作、そして混血女性らしくエキゾチックな「黒いビーナス」であったというのが、ボードレールの伝記作家達が描くジャンヌ・デュバル像である。また、彼女は冷酷、無情、貪欲であって愚鈍であり、この詩人を理解しようとせず、性格的には欠陥だらけであったとする評価が一般的である。肉体としては魅力的であるが、知性と教養に関しては全く無価値であるというのが、ネグル・クレオール（混血を含めて植民地生まれのアフリカ系クレオールを指すフランス語）に対する、その頃のフランス人の評価なのであろう。

詩人の名を不滅にした『悪の華』の初版本を構成する百篇ほどの詩篇のうち、第二十篇から第五十篇までが「恋愛詩篇」であり、そのうちの最初の十六篇の詩がジャンヌ・デュバルを主題にしている。そして、それに続く九篇の詩が、デュバルの対極にあって「白いビーナス」ともいわれていたサバティエ夫人を主題にしている。

サバティエ夫人を理想の女性として崇拝していた頃のボードレールは、「守護の天使、詩神、聖女」といった賛辞を臆面もなくサバティエ夫人に捧げているが、現実の彼女は高級娼婦といえる存在であったようである。パリの小さな劇場で端役をしていたジャンヌ・デュバルとの相違は、白人と混血クレ奥ールの違いであるに過ぎない。ところが、ジャンヌ・デュバル詩篇は「肉の愛」を主題としており、サバティエ夫人詩篇は「魂の愛」を歌っていると



するのが、ボードレール研究家達の定説のようである。皇后ジョゼフィーヌの場合と同様に、「クレオールの子は官能的」といったある種の固定観念が作用しているのだろう。

デュバル詩篇には、「琥珀の肌」を持った彼の愛人が生まれたカリブの島をイメージさせるようないくつかの詩篇が含まれているが、ボードレールはジャンヌ・デュバルを次のように描いている。

夜のように褐色で麝香とハバナの煙草との  
まじった薫りを放つ風変りな女神よ

(「欲求不満の女」より、村上菊一郎訳による)

「ハバナの煙草」とは、18世紀末頃から良質のタバコとしてヨーロッパでも知られるようになったキューバ産の葉巻のことであろう。ナポレオン戦争がもたらした副産物として、葉巻タバコ喫煙の風習が18世紀末から19世紀初頭のヨーロッパ全土にわたって流行していたが、元来、カリブ海域における黒人女性の間では葉巻喫煙の風習があった。ジャンヌ・デュバルにも、こうした黒人クレオールの風習が身についていたのだろう。

同じクレオールといっても、ジョゼフィーヌはフランス系の白人であり、ジャンヌはアフリカ系混血女性である。二人の境遇には大きな隔たりがあったことはいうまでもないが、フランスで暮らしてゆくには、クレオールであることを意識せざる場面が少なくなっただろう。時には、クレオールであることを、したたかに利用していたかも知れない。ともあれ当時のフランスの男達は、クレオールの子にある種のエキゾシズムを感じていたことだろう。

1887年、仏領マルティニック島を訪れたポール・ゴーギャンは、輝く風景と鮮やかな色彩に魅せられ、この島に5か月間滞在して30点ほどの作品を描いている。

驚くほど美しいクレオールの娘が、その豊かな胸に当てて熱帯の果実を割ってくれたこと、また、この島では「白人達は、つぐみ鳥のように大事にされている」ことなどを、ゴーギャンは妻への手紙に書いている。そして3万フランの金でこの島の農園を購入すれば、毎年1万フラン程度の収入が見

込まれ、楽に生活が出来るとも書き送っている。

20世紀が間近い頃にあっても、ヨーロッパ人達は、クレオールの世界に対してこの程度の理解しか持ち合せていなかったのかも知れない。

## 終りに

これ迄の稿では、クリオーリョあるいはクレオールとも呼ばれるクリオージョの様々な側面について触れて来た。歴史的存在としてのクリオージョは、植民地支配者と先住民族の中間的存在として位置づけられることになるが、その全体像は多面的に把握されるべきである。

最近の我国においてはある種の流行現象のように、クレオールに対する関心が表明されているが、既に本稿で指摘したようにその関心の向け方は極めて片寄っているように思われる。いわば、文化人類学あるいは民俗学の視点から示される関心であって、いささか物珍しさを追い求めている感じがしないでもない。そして、ラテンアメリカにおけるクリオージョの存在によって示される歴史的・社会的多様性に対しては、ほとんど関心が示されていないように思われる。

もっとも、クリオージョの全体像を解明しようとした筆者の試みもいささか力不足に終わった感を免れないが、これからも追いつけたい主題である。